連載ミニエッセイ ９

痛風と厄年

２４期　徳田完二

痛風は痛い。ものすごく痛い。「風があたっても痛い」という意味で痛風と名づけられたほどだから。

私は四十歳ごろ痛風になった。夏の夜、右足親指の付け根がちょっと痛いな、と思いながら寝た。そして、夜中に目が覚めた。寝る前にあった痛みが強くなったためである。はじめは骨にヒビでも入ったのだろうかと思ったが、思い当たることはなかった。夕方近くに、幼稚園児だった息子が自転車に乗る練習をサポートして、家の前を何度も走ったせいだろうかとも思ったが、「たったそれくらいのことで骨折？」と、納得がいかなかった。

そのうち痛みはますますひどくなり、しまいには息が詰まるほどになった。足の親指の骨に針金を直に巻き付け、それをペンチでギリギリ締め上げられているような痛み。そんな風に感じた。耐えきれなくなった私は、妻に救急当番医を調べ車で連れて行ってほしいと頼んだ。足の親指付近は赤くなって少し腫れていた。

年配の当番医は私の足を見るなり、

「痛風ですね」

と言った。そして、いま痛み止めを飲むと悪化するからそれは出せないと言い、痛風について一般的説明をしてくれた。そのあと私はクリニックで杖を借り、足を引きずりながら帰った。その後のことはあまり覚えていない。たぶん、夜通し痛みに苦しんだのだろう。時間が経つうち、痛みはだいぶ和らいだものの何日か続いたように思う。

困ったことに、痛みの発作が起こってから数日後に私は出張の予定があった。鎮痛剤が飲めるようになっていたので痛みは引いていたが、足の親指が腫れて靴が履けないので、晴れた箇所に触れないデザインのサンダルを妻に買ってきてもらい、それを履いて出かけることにした。

当時札幌に住んでおり、出張先は函館だったのだが、スーパー北斗という特急列車の通路を、私はサンダル履きでぺたぺた歩いた。ちょっと恥ずかしかったがどうしようもない。出張先での仕事中もずっとサンダル履きで過ごした。

痛風は贅沢病だというイメージがある。ふだん美食ばかりしている人が罹る病気と思っている人が多いのではないか。しかし、自分として贅沢な食事をしたつもりは全然なかった。原因はビールの飲み過ぎである（それを贅沢というのなら、私のも贅沢病なのだが）。痛風になる数年前、仕事上で強いストレスを感じた時期があり、それを紛らわすために毎晩ビールを飲んでいた。そして、そのストレスが去ったあともビールを飲む習慣はしっかり残ってしまった。その後転居した札幌はサッポロビールのお膝元で、北海道限定のおいしいビールが何種類かあったこともわざわい（さいわい？）していた。痛風はそのツケであり、まさしく生活習慣病だ

ったのである。

痛風の原因になるのはプリン体という物質が元になってできる尿酸で、ビールはプリン体を多く含む飲食物の代表格だから、私はなるべくして痛風になったわけなのである。しかし、さいわい尿酸値は薬でコントロールできる。おかげで、その後ずっと正常な尿酸値をキープできているが、その代わり一生涯薬を飲み続けなければならない。

痛風発作に襲われたのは厄年のころだった。厄年（前厄、本厄、後厄の三年）という考え方は、一般的に心身の不調が起こりやすい時期についての経験則から生まれたものではないかと思う。男性の最後の本厄が数え年六十一歳だから、私にはもう厄年はない。とは言え、もうすぐ古稀を迎えるわが身は毎年が厄年みたいなものかもしれないのだが。

連載ミニエッセイ １０

カンジくんのこと

高等類人猿、つまりチンパンジーやゴリラなど知能の高いサルの研究にわりと興味がある。いろいろな研究がある中で類人猿に人間の言葉を教える試みがあるが、その対象はチンパンジーとボノボである。ボノボは「ピグミー・チンパンジー」とも呼ばれ、チンパンジーと外見がよく似ているがチンパンジーより一回りからだが小さい。そして、チンパンジーに負けず劣らず賢いサルである。

以前、こんなテレビ番組を見た。
アメリカのある心理学者がアフリカで見つけたオスのボノボを連れ帰り、言葉を学習させる研究を行ったところ、彼はかなりの言葉を使いこなせるようになった。と言っても、ボノボが英語をしゃべったのではない。声帯の構造が人間とまったく異なる類人猿は人間のような音声を発することができない。そこで、かの研究者は英単語に対応する図形（絵単語とでも言うべきもの）を考案し、それを覚えさせたのである。その図形は一抱えほどもあるパネルにびっしりと配列されていた（つまり、それくらいたくさんの単語を覚えたわけである）。

この方法によって、彼は簡単な英語の質問（たとえば“What kind of food do you like?”）を耳で聞いて理解し、その答えとして、たとえばバナナを示す図形を指させるようになった（なお、このような図形は形から意味を推測できるようなものではない。「言葉自体」と「それが指し示すもの」との間に必然的つながりがないのが言語の本質的特徴と考えられているため、そのようにしたのである）。彼はまた、パネル上に配列された多数の図形の中から必要なものを探し出し、それらを順々に指さすことで、自分の要求を表すこともできた（たとえば“I”→“want”→“water”）。このように、彼は単語をつないで文を作る能力も身につけたのである。

つまり、彼は天才ボノボなのだった。その天才君はカンジ（Kanzi）と名づけられていた。それはスワヒリ語で「埋もれた宝」という意味なのだそうだ。私と“同名”だったため、彼に対していたく親近感を覚えた。

私はある学会で賞をいただいたことがある。学会開催中に催される総会で授賞式があり、記念の楯と賞金を受け取ったあと、受賞の言葉を述べることになっていた。その少し前にカンジくんを取り上げた上述のテレビ番組を見ていた私は、彼にからめてジョークを言った。詳細は忘れたが、私としては気の利いたことを言ったつもりだったのだが、会場の人たちは誰も笑わない。ただ、壇上に座っていた学会の理事さんたちのうちの、私の知り合いだった一人だけが、私の後ろでくすくす笑っているのが聞こえた。

総会が終わって廊下に出た時、大学の後輩に声をかけられた。彼は総会に出席していたようで、こう言った。
「徳田さん、あんなところでジョークを言ったらダメですよ」
それは、あんなところで言っても受けるわけがないという意味だった。昼休みに行われるその総会には学会参加者のうちほんの一部しか出席しない。事業報告や会計報告など面白味のない話を聞くだけの場だからである。そういうわけで、多くの学会参加者はその時間どこかにおいしいものでも食べに行っており、総会に出るのはくそまじめな人（失礼！）ばかりなのである。私は後輩の言葉を聞いて、確かに、と思った。ものを言う時には、相手がどういう人であるかを考えなければならないのだと、あらためて思った。

それはさておき、あの時の賞金がどうなったかと言うと、飲み代などにたちまち消えたような気がする。いただいたのは「研究奨励賞」というもので、たぶん「今後とも研究に励みなさい」という意味合いのものだったと思うのだが…。